

受け継がれる、地域の文化、人と人のコミュニケーション=中土佐町大野見=

清流通信読者の皆様こんにちは。 今月は、四万十川上流域、中土佐町大野見からの話題です。



四万十川の上流域、中土佐町大野見地区。標高 300m の台地の中心を流れる四万十川を取り囲むように、細長い田んぼが広がる。人口は 1500 人ほど。高齢者の割合も高い。地域に 2 つあった小学校も昨年春統合され、地域に 1 つずつの小・中学校の児童生徒をあわせても 100 人足らず。しかし集落を歩けば、子ども達の元気な声がどこからともなく聞こえてくる。

← 夏、四万十川最上流の沈下橋、高樋沈下橋で川遊びすることも盛

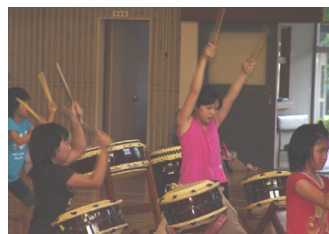
♪ 山あいには、子ども達の声と太鼓の音がこだまする！ ♪

午後 6 時。中土佐町大野見吉野。雨上がりの山あいには、ヒグラシのカナカナカナ・・・という鳴き声が響く。開け放った体育館の中は、それでも 30℃ 以上はありそうに蒸し暑い。この中で、地元の小・中学生 20 名で構成される“大野見源流子ども太鼓”が、熱心に練習を繰り返す。ド〜ンドンド〜ン！

和太鼓は古来より情報伝達の道具として使われていたようだが、その響は心臓の鼓動にシンクロし、自らを鼓舞する性質を持つが故に戦いに利用されたという説がある。確かに、子ども達の元気な掛け声が飛び交う練習場に入ると、一瞬にして鳥肌が立った。そして、「かつお！かつお！」「船が出るぞ！出るぞ！」という、大海原に繰り出すかつお釣り船が見えるようなその掛け声が、周りの者をも巻き込む圧倒的なパワーを持って迫ってきた。

この“大野見源流子ども太鼓”は、8 月中旬に開催される“東京国際和太鼓コンテスト”に出場が決まっている。「コンテストに出場が決まって、この子達には土曜・日曜、夏休みもないのです。でも、誰一人辞めたいとは言わない。太鼓の音がそろったときの爽快感は、体験した者でないとわからないと思います。」指導する“四万十源流太鼓”の岡田猶子さんはそう語った。

コンテストまでは 1 ヶ月を切った。そして、子ども達のあつい夏休みも始まった。



♪ 一つでも多くの、農村文化を伝承していければと願う ♪

7 月上旬、中土佐町大野見、四万十川の支流下ル川に渡された七夕飾り。ひときわ目を引く大きな“七夕馬”。

日本各地に伝承される“七夕馬”は、お盆の時期、祖先がこのワラ馬に乗って帰ってくるといういわれがあるらしい。しかし、このデカイ七夕馬は、かつて高知競馬場で日本全国に感動と勇気を与えたあの“春うらら”の姿である。そして、デカイ馬の周りには 10 頭の小さいワラ馬。その馬には騎手の名前までもがつけられている。

この七夕馬と七夕飾りを作ったのは、“森ノ宮を守る会”（代表：岡村利成さん）のメンバーと 去年 4 月から休校になった旧大野見北小学校の児童達 10 名だ。

「この七夕飾りをやりだして、もう 10 年になります。去年春、地域にあった小学校が休校になりまして、よけい、子ども達と私達大人が交流する場を作りたいと思ひまして…」5 月には鯉のぼり、7 月は七夕、8 月にはお盆の行事、12 月にはクリスマス…と、この地域の大人達子ども達と一緒に四季折々の行事を祝う。このワラ馬もお年寄りの指導を受けながら子ども達で作った。子ども達とこうした作業を一緒にしていく中で、人と人のコミュニケーションのあり方を伝えていきたい、岡村さんはそう語る。

「この地に伝わる農村文化を一つでも二つでも後世につないでいきたいがです。昔の人は自然に対する畏敬の念がありました。そんな、人と人、人と自然とが、もっと密接につながっていた、素朴だけれどよき時代の日本の文化を、子ども達にも知ってもらいたいがです。」

夏の初め、この下ル川流域には、周りを明るく照らしたすほど、無数のホタルが舞うという。「人間同士がバラバラになると、地域はダメになると思うがです。」

このホタル舞うふるさとを、人間同士のつながりを、後世に伝えていきたいという願いとともに、今年も下ル川には七夕飾りが渡された。

